

宗教多元主義とキリスト教宣教

倉 沢 正 則

はじめに

現代の日本の思想家は一神教に疑問を投げかけ始めている。一神教は、人類のある段階ではその発展に役立ったが、今日のようにボーダレスな時代でモザイク社会となりつつある地球村の共生・共存には、かえって障害となると考えている。「自分の信ずる神だけが正しくて後は間違っているという一神教は都合が悪い。」^①という訳だ。現代のあちらこちらにある戦争や紛争の背景には、自分たちを正当化し、他者を排除するあり方が見受けられ、日本の昔からある多神教的宗教観や多元的な価値観を今後の世界は要請してくると論じる。絶対的な価値や原理・原則の旗を立てることを日本人は嫌い、その歴史において、日本は様々な対立する思想や価値、原理原則を柔らかく受け入れて自分に合うように変容してきたその基層には、淡泊で多元的な価値観、世界観があると論じている^②。

多元的なものの見方は、欧米のキリスト教神学者の間にも積極的に受けとめられて来ている。様々な宗教の有為性の認識と、宗教的不寛容が原因となっている戦争や紛争への反省から、キリスト教の絶対性を放棄し、宗教間対話を促進し、調和をもって世界共通の諸課題に当たろうというものだ。そして、他宗教に対するキリスト教の態度として、多元主義を標榜して、宗教の神学の新たな枠組みを追求している^③。

このような、宗教多元主義的キリスト教理解がもたらすキリスト教宣教への挑戦を福音主義神学の立場から検証し、キリスト教宣教の福音主義的枠組みを提示することが、本論稿のねらいである。

1. 宗教多元主義からの挑戦

1) キリスト教の非絶対性／非独自性

宗教多元主義の出発点は、「いかなる宗教も自らを他より優れたものと言うことはできない。」ということにある。どの宗教も「唯一の神的實在」に対する人間の応答の歴史的・文化的違いであって、世界の救済諸宗教は、互いに同等である。「すべての（宗教）伝統が人間存在を自我中心から実在中心へと変革させることにかかわっている。」⁴⁾したがって、キリスト教こそ唯一で絶対的な宗教であり、イエス・キリストこそ独自の救い主であり、この方以外に究極的な救いはないとする見解は、到底受け入れがたい。それはキリスト教内部の信仰理解と信仰表現であって、決してすべての人々にとって規範的なものではないとする。

宗教多元主義の提唱者であるジョン・ヒックは、過去70年間徐々にキリスト教思想家が、その絶対主義的立場を捨てるようになってきたことについて、二つの主要な要因をあげている⁵⁾。第一の要因は、世界諸宗教の靈的豊かさが欧米に知られ、もっともらしい伝統的キリスト教排他主義が疑問視されてきたこと、第二は、「キリスト教の外には救いがない。」とするキリスト教絶対主義が、強欲で暴力的な人間の性質と相まって、世界の広範囲の地域で搾取と抑圧を正当化し、他宗教の人々を苦しめてきたことである。

ここで、他宗教に対するキリスト教の態度の経緯を手短に概観してみよう。キリスト教の優越性と西洋植民地主義が手に手を携えて世界を闊歩した、その負の歴史を認識したキリスト教宣教師や思想家は、キリスト教改宗主義や文化移植という問題をすどく受けとめ、そこに自らの批判を加えてきた。ローマ・カトリックは、第二バチカン公会議（1962-65年）において伝統的な「教会の外に救いはない。」という排他主義的立場を変え、キリストの贖罪の効果を教会以外の人々にも認めるようになった。といっても、キリスト教の独自性や究極性を廃棄したわけではない。同様に、プロテスタントのエキュメニカル陣営も神の啓示とキリストの救いのみわぎの独自性／究極性を主張しつつ、他宗教のうちに「知られざるキリスト」を認め、それらの人々の救いの可能性に目を転じてきた。いずれも他宗教の価値を積極的に受けとめ、それをキリスト教的に位置づけ、彼らの救いを認める方向にある（包括主義）。さらに、キリス

ト教という土俵に立たず、それを数ある宗教の一つとして、見直す見方が多元主義であり、「パラダイム・シフト」⁶⁾とも「神学的ルビコン川渡河」⁷⁾とも表現されるものである。包括主義の避けることのできない次段階ということだろう。

他宗教の靈的豊かさに注目する際、包括主義者や多元主義者は、キリスト教と他宗教の「類似性」ないし、「共通の場」に、その視点を置く傾向にあると言えよう。区別性よりも類似性への強調はおのずとその独自性を浸食し、福音宣教の必要性を殺いでゆく。D. ヘッセルグレーブは、この危険を四つあげている⁸⁾。第一に、宗教間の差異は、単に歴史的な付加物であり、相違の背後にあるものに目を止めるなら、すべての宗教は根本的に同じであり、同じ神を礼拝しているという誤った考えを強めてしまう。第二に、宗教の起源や教えが異なっても、様々な宗教は一つの共通の目標に導かれるという広く行き渡っている考えに油を注いでしまう。第三に、教理や信条はあまり重要でなくなり、個人的な信仰や宗教的経験が至極大切とする人々に同調してしまう。第四に、共通項の追求は、その類似性の背後に潜む深遠な相違を見過ごしてしまう。歴史におけるキリスト教絶対主義の弊害と他宗教の靈的豊かさの知見がキリスト教思想家をして、心理的作用となってキリストの福音の独自性を独善的主張とすり替え、その類似性にもみ志向してゆく傾向にあるのではないか。逆に、宗教間の差異に出来る限り目を止めるとき、むしろそれぞれの宗教の内容や信仰形態が明白となり、それぞれの宗教が特徴づけられてくる。そして、それぞれの宗教の独自性を主張しあうなかで、その宗教のいのちが表出してくるのである。もちろん、それには、独善的態度や高慢な振る舞いは厳に慎まねばなるまい。

さて、宗教多元主義では、ヒックのいうように、世界の諸宗教は、「人間のさまざまな文化的ありかたの中から、実在者あるいは究極者に向けられた異なる知覚と概念、そしてこれに見合った異なる対応を具体的に表したものと」し、これに立って、「さまざまな宗教的伝統のあいだに見られる魅惑的違いと唯一無限の神的実在に対する人間の異なる対応としての根本的な相補性」とが取り込まれている。そして彼らはこの相補性を諸宗教の救済論的構造の類似性から立証するわけである⁹⁾。このヒックの理論からすれば、「唯一の無限の神的実在」がその独自性ということだろう。それが、時代や文化によって、父なる神、ブラフマン、アッター、ダルマカーヤと呼ばれようともである。「独自性」という

用語が、「他と異なり、そのものだけに特有である性質のこと」という意味で使うとき、同じ類の区別性とは違い、比較を許さない絶対的関わりが出てくるのである。ゆえに規範的とならざるを得ない。従って要は、それぞれの宗教の主張する独自性の真偽が問題になるのである。多元主義の場合には、この「唯一の神的實在」ないし、「實在それ自体」の真偽が正に問われることとなる。我々はむしろ、「さまざまな宗教的伝統のあいだに見られる魅惑的な違い」ではなく、ヒックが異なる対応として見た相補性を裏付ける、「人間存在を自我中心から實在中心へと変革させる」救済論的構造内容の決定的な相違にこそ目を止めるべきである。

キリスト教宗教多元主義者が伝統的なキリスト教の独自性を崩したその視点について、その分析と批判がなされている。間瀬啓允は、宗教言語という観点から、ヒックの難点—事實的言語と神話的言語の並置と、事實的真理と神話的真理という二種類の真理を認める—を指摘し、「神の受肉」の新しい解釈の内容を明らかにしている。そして「この難点を避けるために、言語のもつ二つの働き—〈対象表示的〉referential と〈意味表出的〉expressive—に応じた区別、すなわち、知られた〈事実〉fact と伝えられた〈真実〉trustfulness という区別、をつけてみたい」と提案する⁽⁹⁾。これは、歴史的事実とその信仰的理解という構図にもなる。この観点からステパノ T. フランクリンは、ヒックの独自性放棄の思惟経緯を説明する。

ジョン・ヒックのような現代の宗教多元主義者たちが、キリスト教の独自性や、規範性の概念を掘り崩そうとして、伝統的理解である神の受肉や三位一体の教義を攻撃することは、至極当然のことである。ヒックとその同調者たちは、歴史・事実性の実存・普遍性に対する優越性を逆転させてしまった。すなわち、彼らは特定の時と所における神の特別の行為が、あらゆる時と所での神の神話的現臨に対してもつ優越性を、反転させてしまった。⁽¹⁰⁾

ここにこそ福音主義的立脚点がある。歴史的・事實的イエス・キリストの出来事が何にも勝って優先する、この点に独自性／絶対性の論拠を福音主義者は見出しているのである。

2) 福音宣教の後退と宗教間対話の促進

宗教多元的世界におけるキリスト教宣教の内容と実践が吟味されたのは、1938年インド・タンバラムにおける世界宣教会議50周年記念であった。そこではキリスト教信仰の基本事項が確認されるとともに、キリスト教と他宗教の関係についての議論がなされた。この会議で指導的役割を担った人物は、オランダ人神学者であり、宣教学者のヘンドリック・クレマーである⁽¹²⁾。しかし、その後の半世紀は、非キリスト教世界におけるキリスト教の使信の適切さという議論から、キリスト教世界におけるキリスト教の使信の信憑性について取りざたされて来ている。

多元主義(宗教的, 文化的, 思想的)は、今日の世界の趨勢である。そして宗教的多元主義者は、諸宗教共同体の人々との人間関係を、新しい理解と関わりをもって取り組もうとしている。その新しい理解と関わりで見直されるべきものが「宣教」であり、「回心」なのである。アジアやアフリカの国々で、「宣教」や「回心」が恐ろしいものとして受けとめられる理由を、スタンレー・サマルサは、二つ示している⁽¹³⁾。第一に、キリスト教は、軍事的征服、政治的支配、経済的搾取が入り混じってもたらされ、同時にそこに西洋人の人種的傲慢さが色濃く出ていたこと。第二に、排他的主張をもって、何千年間何百万人もの人々の霊的必要性に応え、神学的方向と倫理的指針を備え、他の宗教や文化を退けるものであったことである。このようなキリスト教宣教にまつわる西洋文化移植、改宗主義、人種の偏見という負の歴史は、いわゆる第三世界の国の人々に深い傷となって残り、今日まで続いている。第二次大戦後、各地で独立運動が起り、自分たちのアイデンティティーを確立しようと、伝統的な宗教・習慣を重んじ、西洋的なものへの反発を増すこととなった。こうして、キリスト教宣教は、人々の罪の赦しと平和への良き知らせではなく、霊的・精神的侵略と写り、キリストへの回心は、新しいいのちへの神との関係回復という垂直的なものでなく、ある共同体から他のものへの移行という水平的なものとなり、自分の今までの社会関係を捨てる「裏切り」を意味するものとなった。

このような事態に直面して、その後のキリスト教宣教は、他の人々の宗教や文化を謙虚に受けとめつつ、彼らに適切に福音を伝達する努力を行ってきたが、その一方で、宣教の意味理解が広範囲に考えられるようになった⁽¹⁴⁾。このような中で、宗教多元主義者は、キリスト教宣教というものを、「創造の綻びを繕

い、人類の分裂を克服し、人類と自然と神との破れ目を癒すための、御霊による神の継続的な活動」⁽¹⁵⁾と考える。そして、キリスト者は、諸宗教の人々と協力して、この世界における神の宣教に参加するように召されていると考える。ポール・ニッターは、人類の一致を促進し、世界荒廃の危険をくい止めることが、すべての宗教の共通の目標であり、そのためには、「より広いエキュメニズム」を達成しなければならないとし、「神の国」理解と関係づけて宣教活動と回心についてこう語る：⁽¹⁶⁾

キリスト教神学では、プロテスタントもカトリックも、教会が即神の国ではないことを認めている。世における救いを顕す (revealing-saving) 神の臨在である御国は、教会よりも広く、教会以外の手段によっても働いている。ゆえに、教会の第一義的な使命は、「救済事業」(人々をキリスト者にするにより、彼らを救う) でなく、御国が形づくられるところならどこでも、指標となりしもべととなって、正義と愛の御国に仕え、それを推進することである。

この御国をキリスト者が推進するために、キリストの証しをしなければならない。すべての人や宗教が、歴史における神の臨在の全 (full) 内容を把握するために、キリストについて知らねばならない。……しかし、新しい教会論と真理のための新しいモデルでは、すべての人がブッダや、モハメットや、クリシュナについても知るべきでもある。これはまた、宣教活動の目標でもあり、鼓吹でもある。証しされることは、キリスト者の世における神のご臨在とご目的への理解を深め広げることとなる。この相互の証しと成長によって、御国の実現の働きが進むのである。

宣教をこう理解すると、回心は正当で意義深い関心事となる。しかし、それはもはや、宣教努力の第一義的な目標、存在理由でなくなる。人がキリスト教共同体に回心するなら、宣教者は、その回心とその人の人格的・文化的アイデンティティーの統合として自由に起こる限り、喜ぶのであり、たとえ回心が起こらなくても、宣教のスピリットが萎えることはない。宣教の中心的目標は、相互の証しによって、すべての人が神の真理の深い理解へと心に向け、それに

従う（回心する）限り、実現される。これが、神の御国の成長を保証づけることである。しかるに、宣教活動の目標は、福音を全ての人に宣べ伝えることによって、キリスト者をより良いキリスト者にし、仏教徒をより良い仏教徒にすると、達成されると言うことができる。

ここには明らかに、「神の御国」の定義が「神中心的」なものとなっており、およそ、その臨在（聖霊）は、諸宗教の中にも豊かに働いているということだ。神の国（王的支配）とは、キリストが主ということが否定され、その義と愛と平和の王を世に知らせるべき使命を委託された「教会」こそ、神に召された「王の共同体」であるという独自性が否定されている。ゆえに、此岸的で博愛的人道主義的側面に御国の格下げがおこなわれ、そこに参加する一機関と教会は見なされる。そして、王イエス・キリストが御国を立てるために戻られるという望みを持ち、それゆえにその再臨にそなえ、その宣教の使命を果たす、「終末論的実体 (entity)」としての教会はそこにはない。

「救いを顕す神の臨在」の神とは、三位一体の神なのであり、父なる神・イエス・キリスト・聖霊を分割することはできない。そして、神の御国は、王とともに来るのであり、「正義・愛・平和・いやし」は、神の国のもたらす祝福であって、神の国の本質ではない。「御国が形づくられる」とは、御国の王キリストが救い主・主として宣べ伝えられ、人々の生活にキリストのご支配がもたらされることにある。

「歴史における神の臨在の全内容」とニッターが言う場合、暗に、聖書の啓示の不完全を指摘し、他宗教にその補完を求めている。むしろ宗教改革の伝統を持つ教会では、「一般啓示」という概念をもって、他宗教をこの神の一般的啓示活動に対する応答として位置づける。しかし、その応答は、人の神への反逆のゆえに歪曲され、神の真理を阻んだ実なのである。人の良心の働きによる「善と悪」という意識は、神が人を「神のかたち」に造られた、神の創造のわざの残余的証拠である。神の創造の秩序と人の良心がもたらす道徳性によって、神は墮落した反逆の人類さえも御手の中に保ち、世界の維持と発展のために用いられる。諸宗教にある善性はこの反映である。しかし人の罪性のゆえに、いかなる宗教制度（キリスト教も含めて）も破壊的かつ悪魔的性質を帯びるのであ

る。それゆえに、イエス・キリストによる完全 (full) な啓示 (「特別啓示」) を神が歴史の中で与えられたのである⁽¹⁷⁾。

確かに、他宗教に聞くことは大切である。なぜなら、人は本来的に、霊的なもの、超越的なものに対する心のあこがれや切なる思いをもっているからである。その渇きと求めに人類は皆直面し、それぞれの神 (「究極的實在」) に向かい始める。他宗教の人々との対話は、その宗教的システムや祭儀を通して、彼らのこの渇きを満たそうとする現実とともに立ち、そのような存在であることを共有する場に自分を置くことを意味する。他宗教を知ることは、キリスト者の神理解をさまざまな角度で深めるだろう。と同時に、キリスト者の福音の証しは、ニッターのいうように、「キリスト者をより良いキリスト者にし、仏教徒をより良い仏教徒にする」というものとはならないはずだ。なぜなら、福音そのものに、「わたしを信じ、わたしに従いなさい」というイエス・キリストへのラディカルな応答の要求があるからだ。「ブツダを知る」の知るには、単にその情報を理解する以上のものがあろう。「イエス・キリストを知る」とは、彼について情報を得るということでなく、そこに人格的な応答、すなわち、「いのちをかけて、その方に従う」(コミットメント) ということが意味される。宗教には、このように、真理対決や力の対決ばかりでなく、コミットメント対決の領域が存在するのである。

以上、宗教多元主義からのキリスト教宣教への挑戦とその検証を試みた。そこで、いままでの議論を踏まえた上で、「宗教多元時代のキリスト教宣教」の福音主義的モデルを提示してみよう。

2. 福音主義的モデル構築

福音主義の立場における他宗教理解は、「排他主義」として、「多元主義」のキリスト教思想家より、「宗教絶対主義」として一喝される。その「排他主義」について、ハロルド・ネットランドは、その内容を簡潔に記している⁽¹⁸⁾。排他主義の5つの命題として、(1)イエス・キリストは、神の唯一無比 (unique) な受肉で、神であり人である。(2)イエスのご人格とみわざによってのみ、救いは可能である。(3)聖書は神の書かれた唯一無比な啓示の書であり、真実で絶対 (fully) の權威あるもの。(4)聖書の主張と他宗教のそれが合致しない場合は、他

宗教の主張を誤りとして拒否する。(5)他宗教の教えや行いによる救いの可能性はない。他宗教を拒絶するといっても、その人々を拒絶することを意味しない。同じ神のかたちで造られ、しかも罪と悲惨のなかにある人として受け入れ、慈しみと寛容をもって接する。また、排他主義は、他宗教の信条すべてを偽りとはしない。合致しないところを偽りとするというものだ。これらの命題は、1974年に出された『ローザンヌ誓約』に準拠している。そして、1989年に福音主義陣営から出された『マニラ宣言』もローザンヌ誓約を踏襲して、「私たちは、他の宗教や思想が神へのもう一つの道になり得ず、人間の霊性はもしキリストによって贖われていなければ、キリストが唯一の道であるゆえに、神ではなく審きに導きことを確信する。」(第7項)と確認している。

1) 「神の国」という神学的枠組み

神の国は、聖書の全体を貫く中心的主題である。天地の造り主であり、いのちの主である神は、全世界とすべての人々に対するご自身の王のご支配を、その救いの御業をもって、再び打ち立てられようと働かれている。その救いのご計画は、イスラエルの選びを通して、全世界の人々に向けられた(創12:3; 詩67)。また、イエス・キリストによって御国の基礎がおかれ、彼において(そのご人格と御業、死と復活)御国が到来し、今もあり、また、やがて来る(ルカ17:20-24)。キリストの死と復活は、和解をもたらし、罪をゆるし、悪の力を打ち破られた。キリストの贖罪のわざは、見えるもの見えないものすべての被造物を神に和解させ(コロ1:20)、神の栄光を反映する創造の調和を回復するものとしてもとらえられる⁽⁹⁾。神のキリストにおける主権のご支配は、キリストに対する献身を要求する。キリストの主権が世に知らされ、悔い改めと信仰へと招かれるのである。

「神の国」の神は、造り主、贖い主、慰め主の三位一体の神である。そして、「神の国」は、王なるイエス・キリストの主権が全被造物によって認められることである。御国の福音は、「キリストのご支配」の福音であり、全世界に世の終わりまで、形づくられ成長する教会(「キリストのからだ」と関わりをもって)いる。ジョージ E. ラッドは、御国と教会の関係をこう記す。

御国と教会は分かちがたい関係があるが、両者を同一視してはなら

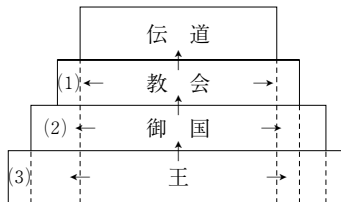
ない。……

御国は、神のご支配であり、その祝福が経験される領域である。教会は、神のご支配を経験し、その祝福を享受している人々の交わりである。御国が教会を造りだし、教会を通して働き、教会によって、世に宣べ伝えられる。神のご支配を認める人々、すなわち、教会なしに、御国はありえない。また、神の御国なしに教会はありえない。⁽²⁰⁾

神の御国は、全歴史の完成を意味する。また、そこには宇宙論的・永遠の広がりがある。キリストを信じ、その活きた共同体である教会は、あらゆる国の人々から神によって起こされ、御国の救いを分かち、犠牲的奉仕に与る。御国のかぎは、教会に与えられている。ゆえに、御国は教会なしには考えられない。このかぎを手放しては、その使命が全うされず、むしろそれを用いて、人間社会の色々な階層にある人々に御国への路を開かねばならない⁽²¹⁾。

したがって、神の御国とは、正義、愛、平和という普遍的な特質を備えた領域を第一義的に表すのではない。そうであるなら諸宗教の協力・共同というものゝの意義が最優先され、また、そのような普遍的特質に献身的に従事する宗教家は、「匿名のキリスト者」とも呼ばれるだろう。また、イエス・キリストその方よりも、彼の在り方や為したわざと同じようなことをする人々のうちには、「知られざるキリスト」がいると言えよう。しかし、「神の国」とは、イエス・キリストの世界大的な王権を第一義的に意味し、この方への忠誠と献身が全世界に求められている。この王は、プラフマン、アッラー、ダルマカーヤという仮面や形態をつけたりはしない。

ポール・ヒーバートは、伝道と教会と神の国の三者関係を、簡潔に図式化する⁽²²⁾。



それぞれ(1)伝道以外の教会活動, (2)教会以外の神の支配, (3)創造以外の神の有様とする。ここでは、王から伝道という基本的な連係が指摘されつつ、しかも、包括的な関わりを提示している。神は国々の動向を御手に治め、地にご自分のご支配をもたらされるばかりか、人々の生活にみわざを行われる。また、王は、その御国をうち建てるために、人として再び来られる。王とその御国の強調は、教会をその自己中心から守る。御国は教会を指す。そこで王は礼拝され、そこに王は喜んで住まわれる。教会は王による和解を受け、その和解の契約共同体は世に対する模範であり、互いに仕え合う「しもべの共同体」である。御国は教会に連なる者に、伝道を行わせる。すべての人々が神を崇め、そのご支配を受けるためである。伝道は、地上における教会の中心的な使命である。教会が地上で為しうる一つの機能であるからだ⁽²³⁾。

2) 「イエスの御名」の独自性

宗教多元主義に立つ人々は、「イエスの独自性」をキリスト教枠内に封じ込める。その独自性をあらゆる文化のすべての人々に適用することを拒絶する。聖書におけるイエスに関する排他的主張は、特にヒックの場合、それ自身イエスのことばでなく、イエスの死後、おそらく二、三代あとの教会の信仰告白(彼らのキリスト観)であるとし、最近の新約聖書学の学問的成果に添った見解となっている⁽²⁴⁾。そして、宗教多元世界において、イエスを理解すれば、「神的靈に満ちた一人の偉大な預言者」なのである⁽²⁵⁾。

また、サマルサは、最近、「改訂されたキリスト論」を展開し、イエス・キリストの普遍性を認めつつ、しかも他宗教の人々にも役立つ見解を提示する。イエス・キリストの普遍性は、一つの「ギリシャ・ローマ・西洋」という個別性の延長、つまり、一つの個別性を規範として据え、他のすべての個別性を消し去るだけでは理解できない。この普遍性は、教会の歴史では知られない方法で、イエス・キリスト〔聖書に記されたイエス・キリストの歩みに符合する神のような人〕による神の啓示によって、すべての人に普遍的に有効とされる深遠な洞察が明らかとなる時理解されるとする⁽²⁶⁾。彼も伝統的なキリストに関する二性一人格論を否定し、ナザレのイエス描写の基本的要素を七つあげ、そして、イエスの独自性 (uniqueness) ではなく、他異性 (distinctiveness) を主張する。そして、その他異性とは、この七つをイエスがご人格のなかに備えていた

だけでなく、その生涯の働きの中で実践したことに見出している⁽²⁷⁾。

両者いづれにしても、キリストを「神」とせず、「神のような人、ないし偉大な預言者」とする。これは、福音主義の見解とは大きく異なる。この溝は、すでに触れた、聖書の根本的な教理や教義の歴史・事実に側面を軽視し、歴史上の唯一の特殊な出来事であるイエス・キリストを、相対化させかつ一般化してしまったところにある。福音主義者は、神がご自身と救いについての明白な真理を聖書において啓示され、その真理は、絶対であり、すべての人にとって規範的であることを交渉可能なこととしない。その真理の中心的なものが、救いはただ、イエス・キリストのご人格とみわざによってのみ有効であるということだ。

イエスの独自性に関する聖書の証言は数多くある⁽²⁸⁾。その受肉、神の決定的な自己啓示としてのイエス、みち・真理・いのちと主張し、神への唯一の道であるイエス、人の救いを可能にする唯一の方、一度限りの贖いの犠牲となって罪の赦しと神の義を与えるイエス、神と人との唯一の仲保者、主として天地で崇められる存在として示されている。しかし、宗教多元主義者は、その証言を文字通り受け取るのではなく、シンボリックなもの、詩的なもの（「神話的」）として再解釈し、そのすべての人々に対する絶対的な独自性を拒絶する。そして、イエスの独自性を裏付ける受肉や贖罪や復活を一般的な宗教的意味合いに普遍化⁽²⁹⁾して、諸宗教的なコンテキストに並置させるのである。イエス自身への信仰を求め、救いをその人において可能とする、このキリスト信仰は、他宗教の中であって、すべての人に規範的なものではなく、単に他異的な（distinctive）特徴に過ぎないものとする。

最後に一つ言えるのは、イエスの独自性証言が、ギリシャ・ローマ世界の宗教多元社会に発せられていたという事である。そして教会は、その社会にあってマイノリティーであった。彼らはそこで、諸宗教の一つとして、キリストを位置づけようとはしなかった。イエスご自身についての証言は、正に過激なもので、ローマ皇帝に賦せられていた「主」ということばを、イエスに付けるほどのものであった。それもそのはずで、イエス自らが、ご自分について過激な発言をし、それゆえに、神の冒涇者とされまたカイザルへの反逆者として、ユダヤ人やローマ人によって十字架に渡されたのである。救いを何にもましてこのイエスというご人格への信仰と従順に帰したのである。「信仰の必要を説明す

る聖書の多くの聖句は、信仰の対象として、キリストという御方を提示している。そこに意図されているのは、キリストの原則以上のことである。それらは、この御方を救い主・主とするよう求めているのである。」というフェルナンドのことばは重い⁽³⁰⁾。「世界中を騒がすほどの」主張（独自性証言）が、単に詩的・神話的表現として理解されるには、あまりに静的と言わざるを得ない。

3) 大宣教命令

キリストの全世界的な王権とその救いのキリスト絶対性は、自ずとその救いの福音をあらゆる文化にある人々に、その宗教的好みや関わりを越えて、宣べ伝える使命に導く。そこで、宗教多元主義者からの排他主義者への挑戦は、救いがただイエス・キリストによるものであるなら、「キリストの福音を聞く機会のなかった者」の運命はどうなるのか、というものとなる。この課題は、福音主義者の間において見解が異なっている。ネットランドは、それぞれの見解を紹介して、四つに分類する。(1)イエス・キリストへの明白で自覚的な応答によってのみ、人は救われる。(2)キリストの福音を聞く機会のなかった人のある者の救いの理論的可能性を容認するが、神の主権的正義の奥義にこの課題をゆだねる。(3)明白なキリストへの信仰なしでの救いの可能性を進んで考える。旧約の人々の救いと関連に注目する。(4)福音を聞く機会のなく死んだ人には、死または死後すぐ、キリストへの決断の機会が与えられる⁽³¹⁾。旧約の人々の救いと関連で、彼らをキリスト以後の「福音を聞く機会のなかった人々」と並置することについては、やや疑問を覚える。旧約では、神と神の民イスラエルとの契約関係があり、神によって始められ、それに信仰によって応答したイスラエルがあるし、彼らの祭壇における「いけにえ」はまさに、贖いの仲保者を初期準備の意味で表しており、神の受けいれられる犠牲とされていたと考えられるからである⁽³²⁾。この課題は今尚その議論が継続している。キリストの絶対的王権とその救いの普遍性は、この課題のゆえに、その使命を託された教会をして、大宣教命令の遂行に赴かせるものである。

イエスの独自性を主張する福音宣教は、宗教多元主義者には、「傲慢であり不寛容」と写る。そして、真正な宗教間対話を妨げるものとされる。しかし、聖書が示す対話は、諸宗教との「真理」の共通の探求ではなく、キリストの救いとその普遍的絶対的王権を「論じ、説き、誤解を明らかにし、納得させ、疑問

に答え、チャレンジする」ものである。キリスト教排他主義に浴びせられる不寛容という非難は、多分に道徳的側面が強い。違った宗教をそのまま受けとめずに、一つの宗教だけを正しいとするのは、傲慢であり、「心の狭い」態度だというのだ。これは正に、多神教的土壌に育っている人々の大多数の意見である。

寛容とは、勿論、何でも受け入れることではない。人は自殺しようとしている者を寛容に放ってはおかない。それを止めさせ、生きるよう励ます。事実と反する言明を人は寛容をもってそのままとはしない。その誤りを指摘し、事実を誤解することのないよう諭す。ネットランドは、適用されるべき寛容の概念の三つの際立ったコンテクストを示唆する。第一は、法的で、信教の自由という法的寛容である。宗教を選ぶ自由である。この自由のない国々が現在も多い。第二は、社会的で、いかなる宗教を信奉していても、社会的差別を受けないというもの。第三は、知的で、その宗教信条そのものは誤っていても、それを信奉している人を受け入れる⁽³³⁾。福音主義者は、「神の寛容」をこれに加味する必要がある。第一に、ご自身がお造りになられた人間の反逆に対して、神は、その豊かな忍耐をもって、その審きを延ばしておられるばかりか、御子キリストによる救いを用意されたこと。第二に、神は、悔い改めて御子を信じる信仰を求めるが、強制的には行われぬこと。造られた者の人格を尊重し、人間の自由意志に働きかけておられる。神は人が自分で決断をする自由と時を与えておられる。この「神の寛容」を見落としてはならない。

以上、キリスト教宣教に関する宗教多元主義からの挑戦を、福音主義の立場から検証し、その論点を福音主義的枠組みの中で捉えてみた。そこには、神の御国と教会とその宣教的使命が織り合わされている。宗教多元主義は、今日のキリスト者を第一世紀のローマ帝国の世界へと近づけ、また、現代世界を「地球村」として考えさせ、それぞれの文化における真正な聖書解釈を促し、ますます福音の真理の明確な理解へと導く⁽³⁴⁾。そして、古屋安雄が、「現代は、世界的に宗教が多元化している時代である。それが世俗化によるもの、または国際化によるものであれ、あるいは伝道布教によるものであれ、一つの社会のなかに、多様な宗教が共存している時代である。そして、その複数の中から各人が自分の意志により、どれでも選択できる時代になりつつある。」⁽³⁵⁾と指摘するように、もはや、国、村、先祖代々の家の宗教だからというものではなくなる。

勿論、宗教を選ばないことも可能だ。そのような時代であればこそ、福音主義者は、いよいよイエス・キリストとその福音の独自性を確信し、しかも謙虚に対話と寛容をもって、「御名を世に知らしめる」働きに勤しむことができるのである。

注

- (1) 梅村 猛 「新春対談：日本人を語る」朝日新聞 1990年1月8日 11面。
- (2) 山折哲雄 「日本人の可能性」朝日新聞 1995年8月10日 4面。
- (3) John Hick and Paul F. Knitter, *The Myth of Christian Uniqueness* (Maryknoll: Orbis, 1987) を参照。ニッターは、その序文の中で、「私たちは『キリスト教の独自性 (uniqueness)』を『神話』と呼ぶが、それは、キリスト教の独自性が全くの偽りであり、ゆえに捨て去るべきと考えるからでなく、むしろ、すべての神話的言語のように、これを注意深く理解しなければならない。それは解釈されるべきで、その「真理」というものは、字義上にあるのではなく、変わりうる歴史的・個人的意味の内にある。この書は、キリスト教の独自性を否定するものでなく、それを新しく解釈するものだ。……キリスト教は、勿論まさに字義の意味でユニークであるが、この意味でまた、あらゆる宗教的伝統もユニークなのである。すなわち、それはただひとつであるし、それと同じものは、他にないという意味でユニークなのである。」(vii) と記している。他宗教に対するキリスト教の態度として、三つの類型、すなわち、排他主義、包括主義、そして多元主義が広く受け入れられている。
- (4) ジョン・ヒック 『もうひとつのキリスト教』 間瀬啓允・渡部 信訳 (日本基督教団出版局 1989年) 155頁。
- (5) John Hick, "The Non-Absoluteness of Christianity." in *The Myth of Christian Uniqueness*. John Hick and Paul Knitter eds. (Orbis, 1987), p. 17.
- (6) Arthur F. Glasser, "A Paradigm Shift?" in *Contemporary Theologies of Mission*. Arthur F. Glasser and Donald A. McGavran eds. (Baker, 1983), p. 215ff.
- (7) John Hick, 前掲書, 22頁。
- (8) David J. Hesselgrave, "Christian Communication and Religious Pluralism: Capitalizing on Differences." *Missiology: An International Review*. Vol. XVIII, No. 2 April 1990. p. 133f.
- (9) ジョン・ヒック 『もうひとつのキリスト教』 155頁。
- (10) 間瀬啓允 「ヒックの宗教言語論」『宗教多元主義の探求』 間瀬啓允・稲垣久和編 (大明堂 1995年) 57頁。
- (11) ステパノ・フランクリン 「福音主義神学の論理」『宗教多元主義の探求』 219頁。同じようなヒックに対する批判として、Leslie Newbigin, "Religious Pluralism and the Uniqueness of Jesus Christ." in *International Bulletin of Missionary Research*. Vol. 13. No. 2.

- April 1989, p. 50. がある。
- (12) 彼の見解は、その著書、H. Kraemer, *The Christian Message in a Non-Christian World*. (Harper & Brothers, 1938) に表されている。
 - (13) S. J. Samartha, *One Christ – Many Religions*. (Orbis, 1991), p. 148.
 - (14) 詳しくは、David J. Bosch, *Transforming Mission*. (Orbis, 1991), pp. 368–510. を参照。
 - (15) S. J. Samartha, *One Christ – Many Religions*. p. 149.
 - (16) Paul F. Knitter, *No Other Name*. (Orbis, 1985), p. 166, 209, 222.
 - (17) 「一般啓示」と「特別啓示」の関係については、倉沢正則「神の啓示：その二重の性質」『基督神学』第五号 1990年を参照。
 - (18) Harold A. Netland, *Dissonant Voices: Religious Pluralism and the Questions of Truth*. (Eerdmans, 1991), p. 34.
 - (19) Bruce Bradshaw, *Bridging the Gap: Evangelism, Development and Shalom*. (Marc, 1993), p. 16.
 - (20) George E. Ladd, *A Theology of the New Testament*. (Eerdmans, 1974), p. 119.
 - (21) Johannes Verkuyl, “The Biblical Notion of Kingdom.” in *The Good News of the Kingdom*. Charles Van Engen and Dean S. Gilliland eds. (Orbis, 1993), p. 73.
 - (22) Paul G. Hiebert, “Evangelism, Church, and Kingdom.” in *The Good News of the Kingdom*. p. 159.
 - (23) *Ibid.*, p. 160f.
 - (24) ジョン・ヒック 『もうひとつのキリスト教』 53頁。
 - (25) John Hick, “The Non-Absoluteness of Christianity.” in *The Myth of Christian Uniqueness*. p. 31.
 - (26) S. J. Samartha, *One Christ — Many Religions*. p. 40. この深遠な洞察が、他宗教の中に息づいているとサマルサは考えていると思われる。
 - (27) *Ibid.*, p. 134. その七つは、1) 神の国をメッセージの中心とし、そのわざと働きによって、その価値を現した。2) 神によって委ねられた召命へのコミットメント。3) 世のものからの自由。4) 貧しい人々への深い憐れみ。5) 神の律法への服従。6) 受け継がれた知恵を批判的に受け入れる。7) 死にまでも神に従う姿勢。
 - (28) 例えば、ヨハ1：1, 14；14：6, 9–10, 使4：12, ロマ3：21–26；5：12–21, ビリ2：10–11, コロ1：19, 1テモ2：5, ヘブ1：1–3, 1ペテ3：18。
 - (29) ジョン・ヒック 『もうひとつのキリスト教』 39–49頁。 John Hick, “The Non-Absoluteness of Christianity.” in *The Myth of Christian Uniqueness*. pp. 30–34.
 - (30) Ajith Fernando, *The Christian’s Attitudes Toward World Religions*. (Tyndale House Publishers, 1987), p. 128.
 - (31) Harold A. Netland, *Dissonant Voices*. pp. 262–277.
 - (32) Ajith Fernando, *The Christian’s Attitudes Toward World Religions*. pp. 137–139. 彼は例外として、五人（アブラハム、ヨブ、パラム、イテロ、メルキゼデク）をあげ、それぞれ注釈し、「聖書は神が直接語り、福音を聞くことなしに救いを与えられた例外的

な人々について、はっきりと言い表していない。」と締めくくっている。

- (33) Harold A. Netland, *Dissonant Voices*. pp. 305–309.
- (34) D. A. Carson, “Christian Witness in an Age of Pluralism.” in *God and Culture*. D. A. Carson and John D. Woodbridge, eds. (Eerdmans, 1993), pp. 64–66.
- (35) 古屋安雄 『宗教の神学』（ヨルダン社 1985年） 58頁。

[Abstract in English]

Religious Pluralism and Christian Mission

M. Kurasawa

Modern Japanese intellectuals have doubted monotheism because it enhances a conflict between nations and peoples. They contend that the world needs a polytheistic religion and pluralistic value system. Western Christian theologians have also gradually taken pluralistic perspectives for religion and abandoned the uniqueness and finality of the Christian gospel. This paper will deal with the challenge of the pluralistic understanding of Christian mission and an evangelical response to it.

1. Challenge of religious pluralism

a) Non-absoluteness/ non-uniqueness of Christianity

Religious pluralism says that no religion may legitimately assert its superiority and that any religion is a human cultural-historical expression toward “Ultimate Reality” or “the Real.” John Hick is one of its powerful advocates. He has two reasons why some theologians have refused the absoluteness of Christianity: (1) the richness of world religions has become known to the Western world; and (2) Christian absoluteness has justified the Westerner’s exploitation and oppression toward the people of two-thirds world and caused suffering to the people of other faiths.

b) Recession of world evangelization and promotion of interreligious dialogue

Religious pluralists have reconceptualized Christian mission and conversion. They regard Christian mission as “God’s continuing activity through the Spirit to mend the brokenness of creation, to overcome the fragmentation of humanity, and to heal the rift between humanity, nature, and God.” They say that Christians are called to participate in God’s mission in cooperation with people of other faiths. Thus they throw away the traditional understanding of Christian mission and promote the interreligious dialogue to work together for human unity and peace.

2. An Evangelical response

a) “The Kingdom of God” as a theological framework

The Triune God is the God of the Kingdom. The Kingdom of God is fully manifested through Christ's second coming. It consummates the whole of history, and its scope is cosmic. It refers primarily to the universal lordship of Jesus Christ and demands the allegiance of all creation to Him.

b) “The Name of Jesus”

Religious pluralists reject any exclusive statement about Jesus as “God” and regard Him as a god-like man. They ignore the historical and factual aspect of the essential Christian doctrines and relativize the once-for-all historical events of Jesus Christ. The uniqueness of Jesus' name, however, was once proclaimed by the Early Church to the polytheistic Roman world so that the Christians were regarded as creators of dissension throughout the world.

c) The Great Commission of Jesus Christ

Christ's universal lordship demands the Church proclaim the Gospel to people in every culture, crossing religious barriers. The challenge of religious pluralists to exclusivist Christians is the question of the destiny of those who have never heard the Gospel. This issue is still in discussion among the Evangelicals. Religious pluralists see the exclusive claim of Jesus Christ to be arrogant and intolerant. However, tolerance does not mean accepting everything as right. For example, to leave a person alone who is about to commit suicide for the sake of tolerance is not right, is it? Shouldn't we try to persuade him/her to not carry out that act? Moreover, we should emphasize God's tolerance (patience) which leads us to repentance.

Religious pluralism will today lead Christians to consider the Christian context in the world of the Roman Empire in the first century, to the authentic biblical hermeneutics in every culture, and to the true understanding of the Gospel. It brings the coexistence of religions and the age of choosing freely whatever religions people desire. In such an age, we can hold the uniqueness of Jesus Christ and make Him known to the world with a humble attitude.

〔日本語要約〕

宗教多元主義とキリスト教宣教

倉 沢 正 則

はじめに

現代の日本の思想家は一神教に疑問を投げかけ始めている。それは一神教的理解が国家間や民族間の戦争や紛争を助長させるものと考えからである。世界は今や多神教的な宗教や価値体系を必要としていると彼らは主張する。欧米のキリスト教神学者たちもまた、次第に宗教を多元主義的視座をもって考えるようになり、キリスト教の福音の独自性や絶対性を放棄してきた。この小論は、キリスト教宣教における多元主義的理解を検証し、福音主義的応答を提示するものである。

1. 宗教多元主義からの挑戦

1) キリスト教の非絶対性／非独自性

宗教多元主義者は、いかなる宗教もその優越性を主張できないとし、また、どの宗教も「唯一の神的実在」に対する人間の応答の歴史的・文化的違いであるにすぎないと主張する。ジョン・ヒックは宗教多元主義の強力な提唱者の一人である。彼は、なぜ何人かのキリスト教神学者がその絶対主義的立場を捨てるようになったかを示し、二つの主要な要因をあげている。第一は、世界諸宗教の霊的豊かさが欧米に知らされたこと、第二は、キリスト教絶対主義が世界の広範囲の地域で搾取と抑圧を正当化し、他宗教の人々を苦しめてきたことであるとみる。

2) 福音宣教の後退と宗教間対話の促進

宗教多元主義者は、キリスト教宣教とその回心の再概念化に取り組んでいる。彼らはキリスト教宣教を「創造のほころびを繕い、人類の分裂を克服し、人類と自然と神との破れ目を癒すための、御霊による神の継続的活動」と考える。そして、キリスト者は、諸宗教の人々と協力して、この世界における神の「宣教」に参加するように召されているとする。こうして彼らはキリスト教宣教についての伝統的理解を捨て、宗教間対話によって、人類の一致と平和に共に労するよう働きかける。

2. 福音主義的モデル構築

1) 「神の国」という神学的枠組み

御国の神とは三位一体の神である。神の国はキリストの再臨によって完全に顕れる。神の国は全歴史を完成させ、その範囲は宇宙大である。神の国の第一義的意味は、イエス・キリストの普遍的主性であり、彼に対する忠誠を全被造物に求める。

2) 「イエスの御名」の独自性

宗教多元主義者はイエスを神とする排他的主張を退け、彼を神のような人とみなす。この見解は、聖書の根本的な教理の歴史・事実に側面を軽視し、歴史上唯一の特殊な出来事であるイエス・キリストを相対化させかつ一般化したことによる。イエスの御名の独自性が初代教会によって多神教的なローマ世界に主張されたゆえに、キリスト者は世界を騒がすほどの者と見られるに至ったのである。

3) 大宣教命令

キリストの普遍的な主性は、教会があらゆる文化の人々に宗教的な障壁を越えて福音を宣べ伝えることを求める。宗教多元主義者の排他的立場をもつキリスト者に対する問いは、福音を一度も聞いたことのない人々の運命に関するものである。この課題は福音主義者の間で今も討議事項である。イエスの独自性を主張する福音宣教は、宗教多元主義者にとって、傲慢であり不寛容と写る。しかし、寛容とは何でも受け入れることではない。人は自殺しようと思つている者を寛容に放つてはおかない。それを止めさせ、生きるよう諭す。事実と反する言明を人は寛容をもってそのままとしない。寛容を問うなら、福音主義者は「神の寛容」を見落としてはならない。

宗教多元主義は、キリスト者に、今日の世界をいよいよ第一世紀のそれに近づけさせ、それぞれの文化における真正な聖書解釈を促し、ますます福音の真理の明確な理解へと導くこととなる。宗教多元社会は、多様な宗教が共存し、その複数の中から各人が自分の意志によりどれでも選択できる時代を導く。そのような時代であればこそ、福音主義者は、イエス・キリストとその福音の独自性を確信して、しかも謙虚に対話と寛容をもって、「御名を世に知らしめる」ことができるのである。